

第12回 2020年度帝京大学大学院教職研究科フォーラム —子どもを見つめて—

「学びの蓄積を社会や将来に生かす—キャリア・
パスポートの有効活用における教師の役割—」

赤堀 博行・清水 静海・安部 恭子・濱田 直樹・
國武 淳之介・田村 亜紀子・宮坂 英行

帝京大学教職大学院教職研究科

I 概要

1 2020フォーラムの趣旨

これからの学校には、教育基本法に示された教育の目的及び目標の達成を目指し、一人一人の児童生徒が、自己認識を深め、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の担い手となり得るような資質・能力を育成することが期待されている。学校においては、こうした資質・能力を育成するための目標、内容、授業時数を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程を編成することが求められる。適切な教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、各学校がそのことに資する教育課程の編成、実施等を社会との連携及び協働によりその理念を実現していくという社会に開かれた教育課程の実現が重要とされている。

児童生徒が持続可能な社会の担い手となるためには、児童生徒に将来、社会や職業で必要となる資質・能力を育むことが必要である。それは、学校で学ぶことと社会との接続を意識し、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育むことでもあり、確かな学びの蓄積が重要なる。今次の学習指導要領の改訂においては、学校の教育活動全体を通して児童生徒が自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しを持ったり、振り

返ったりしながら学ぶ「主体的・対話的で深い学び」を実現するなど、教育課程全体を通じてキャリア教育推進の必要が示された。また、各学校段階での学びが継続、発展し、児童生徒がそれを社会に生かすことができるようにするための「キャリア・パスポート」を、特別活動を中心に推進することとされた。

そこで、今回のフォーラムでは、学びの蓄積を社会や将来に生かすができるようにするために、キャリア・パスポートを有効活用する上での教師の役割を追究することとした。(赤堀 博行)

2 2020フォーラムの意義

この1年間、新型コロナウイルス感染の拡大(以下、コロナ禍とする)にともない、緊急事態宣言が発出されるなど、学校では、臨時休校、変則的な登校などを余儀なくされ、「学びの取り戻し」や「学びの質の確保」に向け、様々な対応が工夫されてきた。関係の皆様のご尽力に敬意を表したい。また、教育の現場がこうした営みに注力できた背景には、医療従事者はじめ、エッセンシャル・ワークに従事される皆様の献身的なご協力があります。改めて感謝申し上げます。帝京大学大学院教職研究科(以下、本教職大学院とする)では、5月連休明けよりオンラインでの授業を開始し、1ヶ月後の6月第2週より対面での授業に切り替え、実習校等のご協力、院生、教職員、大学当局、チーム帝京でどうにかコロナ禍を乗り越え、年度末を迎えることができた。

「学びにおける自立」での課題：コロナ禍の中で顕在化

去る1月26日、中央教育審議会は、2020年代の教育の展開を視野に入れて、答申「令和の日本型教育の構築」を公表し、ICTの利活用を進めながら、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現を目指す」教育を積極的に展開するよう要請している。その中で、学校の臨時休業中に顕在化した「学びにおける自立」での課題について触れ、多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようにすることの必要性を指摘している。教師には、「子供の成長やつまり、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえて、きめ細かく指導・支援すること」及び「子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくこと」が強く求められている。とりわけ、小学校低学年では、「学びの自覚化」、すなわち、「他の児童や教師との対話が学びを深めるために存在すること」の理解を促し、中・高学年以降の学びにつなげていくことが必要であるとしている。

本教職大学院フォーラム：日頃の教育実践や研究成果の公開と院生の教育の一環

本大学院では、開設初年度より、日頃の教育実践や研究成果を広く公開する場を設け、そこでの協議や交流の成果をその後の教育や研究に生かすため、多様な事業を行ってきた。フォーラムの開催はその重要な一つである。これまでと同様に、本教職大学院を構成する院生、教職員が総掛かりで関わり、院生の教育の重要な機会の一つとしても位置付け、今回は、基調報告者、パネリストとして院生も参加している。

これまで、フォーラムの主題は、一貫して、学びの主体である「子ども」に焦点を当て、本大学院の特長や時々の教育課題との関連を重視して設定してきた。今回は、「学びの蓄積を社会や将来に生かす」とし、「キャリア・パスポートの有効活用における教師の役割」に焦点を当て、基調講演、基調提案、シンポジウムで構成している。これまでのフォーラムでは、実践報告及び協議を分科会で行い、全体会

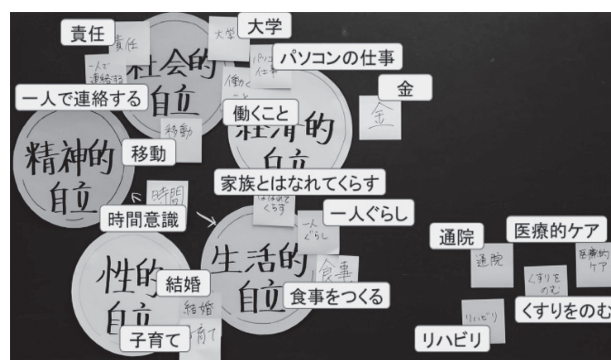
で分科会の成果を共有することになっていたが、コロナ禍での開催ということで、分科会での協議を取り止めることとした。また、三密を避けるため、Zoomでの参加をお願いすることとなった。

キャリア・パスポートの作成とその利活用

2017・2018改訂学習指導要領（以下、新学習指導要領とする）では、「教育課程全体を通じてのキャリア教育を推進すること」の必要性が明示され、各学校段階での学びが継続、発展し、児童生徒がそれを社会に生かすことができるようにするため、「キャリア・パスポート」を作成し、その利活用を、特別活動を要として、学校の教育活動の全体を通して推進することとされている。そこで、今回のフォーラムでは、キャリア・パスポートを有効に利活用する上での「教師の役割」を探っていきたいと考えている。

高等学校段階で、生徒が、将来直面する様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会的・職業的に自立していくためには、「生徒一人一人が、学ぶこと、働くこと、そして生きることについて考え、それらの結び付きを理解していくことで、多様な他者と協働しながら、自分なりの人生をつくっていく力」を育むことが必要であるとされている（文部科学省『高等学校学習指導要領解説・特別活動編』（2018.7）、第6章）。義務教育段階から、このことを視野に入れて、子どもたちのキャリア形成を促進することが期待されている。

下のスナップは、キャリア・ガイダンスを取り上げた模擬授業での板書の一コマである（2020.11.24、特別支援学校・高等部「準ずる教育課程」の模擬授



模擬授業での板書

業「自立した生活」、秋期授業科目「個の学びを支援する授業方法と授業研究」。

2017年の学校教育法の改正にともない、専門職大学院においては、広く社会との連携により教育課程の編成やその円滑かつ効果的な実施を目指すことが義務付けられた。本教職大学院は、教職に関わる専門職大学院で、教育界との連携を広げ、関係機関や関係者との密接な連携をとることが期待されており、このフォーラムもその一貫として位置付けている。コロナ禍で様々な制約を余儀なくされているが、期待に応えていきたいと思う。

基調講演並びにシンポジウムのコメンテーターをお引き受けいただいた文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・安部恭子先生、シンポジストをお引き受けいただいた東京都練馬区立北町小学校長・田村亜紀子先生、神奈川県教育委員会教育局支援部指導主事・宮坂英行先生、ご後援、ご協力をいただいた多くの教育委員会、当事者として真摯に取り組んでくれた院生、皆様に心より感謝申し上げます。（清水 静海）

Ⅱ 基調講演

「キャリア・パスポート」実施に係る基本的な考え方～特別活動を要としたキャリア教育～

文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官 安部 恭子

はじめに

子供たちが現在や将来に夢や希望を抱き、その実現を目指して物事に前向きに取り組むことは、「今の自分」に価値や意味を見いだすことにつながる。そして、将来直面する様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会的・職業的に自立していくためには、一人一人の子供が、「生きること」「働くこと」「学ぶこと」について考え、多様な他者と協働しながら、自分なりの人生をつくっていくことができるようにする。これまでの「学び」が今の自分になり、今の「学び」が将来の自分や社会につながることを意識して学習や生活に取り組むことができるように、キャリア教育の充実を図ることが求められる。



安部 恭子氏

1 学習指導要領におけるキャリア教育

平成29年に改訂された小・中学校の学習指導要領では、第1章総則第4の1(3)に、「児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」が示された。このことにより、これまでは高等学校の学習指導要領にのみ示されていたキャリア教育の充実が小・中学校においても明示されるとともに、特別活動が学校の教育活動全体の取組をキャリア形成につなげていくための中核的な時間として明確に位置付けられたのである。そして、キャリア教育の視点から小・中・高等学校の系統性が明確になるように、特別活動において、新たに学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」が設定された。

2 「キャリア・パスポート」の活用

キャリア教育における教材等の活用については、平成28年12月21日の中央教育審議会答申で「(前略)小・中・高等学校を見通した、かつ、学校の教育活動全体を通じたキャリア教育の充実を図るため、キャリア教育の中核となる特別活動について、その役割を一層明確にする観点から、小・中・高等学校を通じて、学級活動・ホームルーム活動に一人一人のキャリア形成と実現に関する内容を位置付けるとともに、『キャリア・パスポート（仮称）』の活

用を図ることを検討する。(後略)」と示された。

そして、学習指導要領第1章総則第3の1(4)に、「(前略)児童(生徒)が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」が示され、学習指導要領第6(5)章特別活動の第2〔学級活動〕の3の(2)で、「2の(3)の指導に当たっては、学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童(生徒)が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」と示された。ここで示されている「2の(3)の指導」とは、学級活動(3)の指導のことである。

平成31年3月29日に文部科学省児童生徒課から発出された「『キャリア・パスポート』例示資料等について」という事務連絡文書では、「キャリア・パスポート」の目的について「小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的にかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。」と、示している。

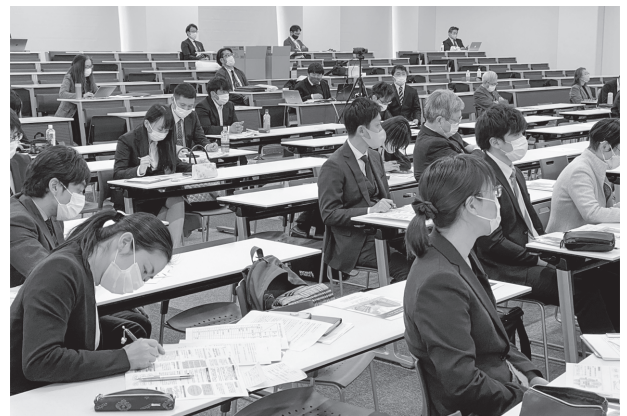
こうした目的について学校全体で共通理解を図って取り組むことで、効果的な指導につながるといえる。

「キャリア・パスポート」やその基礎資料であるポートフォリオ的な教材等を活用することで、各教科等の学びと特別活動における学びが往還し、教科等の枠を超えて、特別活動での実践や生活、学習などが自己の将来や社会づくりにつながっていくことが期待される。そのためには日ごろから各教科等における学習や特別活動において学んだこと、体験したことを振り返り、気付いたことや考えたことなどを蓄積しておくことが大切である。それを学級活動(3)においてまとめたり、つなぎ合わせたりする活動を行うことで、目標をもって生活できるようになったり、各教科等の学ぶ意義を自覚できるようになっ

たり、学ぶ意欲が高まったりする。「キャリア・パスポート」は、子供たちにとっては自己理解を深めるためのものとなり、教師にとっては一人一人の児童の様々な面に気付き、児童理解を深めるためのものとなる。学習や生活の見通しをもち、振り返ることを積み重ねることにより、子供たちは、これまでの自己の成長や努力を把握することができる。特に、気付いたことや考えたことを書き留めるだけでなく、教師が子供たちと対話をしたり、子供同士の話し合いを行ったりすることにより、子供たちは自分自身のよさ、興味・関心など、多面的・多角的に自己理解を深めることになる。

おわりに

コロナ禍により各学校においては学校行事をはじめとしていろいろな教育活動が制限され、昨年度までと同じようにはできない状況にある。しかし、だからこそ感染症対策を講じながら創意工夫して実践することが大切である。そして学級活動(3)の授業で「キャリア・パスポート」を効果的に活用し、子供たちが話し合いを生かして自分に合った目標を立てて生活や学習に取り組んだり、振り返りを通して自己のよさや成長を実感したりしてなりたい自分に向けて前向きに頑張ることができるようにすることが求められる。



聴講風景

Ⅲ 実践報告

1 キャリア・パスポートの課題と解決に向けて

教職実践専攻スクール・リーダーコース

濱田 直樹

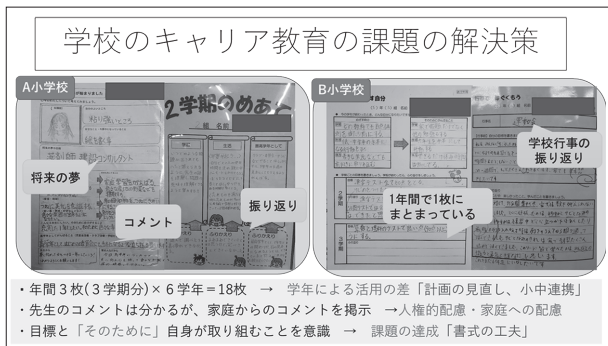
キャリア・パスポートの活用について、課題と対策を3点述べる。

課題1は、学校間でキャリア教育に差があるということである。

キャリア教育全体計画及び年間指導計画の作成をしている学校と作成していない学校がある。下図「学校間でのキャリア教育の差」の左の写真はファイルである。低中高により色を分けされ、低学年は白、中学年は青、高学年は赤と使い分けしている。20枚分のプリントがポートフォリオされることになる。中央の写真は、表紙の写真で、小中通して活用できるようになっている。右の写真は、掲示している様子である。学校公開、保護者の参観で共有することができる。



学校間でのキャリア教育の差



A小学校とB小学校の活用の比較

A小学校とB小学校の活用で比較する。A小学校の児童は、自分の良い所を「粘り強い」「絵をか

くことが好きだ」として、将来の夢を「薬剤師や建設コンサルタント」としている。教師と家の人からのコメントも書かれている。

B小学校の児童は年間のめあてカードが1枚にまとめられ、振り返りやすいように活用されている。

また、学校行事の振り返りでも活用されている。

課題として、年間3枚(3学期分)×6学年=18枚は使用することから 学年による活用の差や「計画の見直し、小中連携」が考えられる。また、教師のコメントは分かるが、家庭からのコメントを掲示する際に、人権的配慮・家庭への配慮が必要となる。そのために、児童の課題の達成に向けて「書式の工夫」が各学校として必要である。

課題2は、児童が「なりたい!」と思う職業と親が「なって欲しい。」と思う職業のずれである。2020年度版 新小学1年生の「将来就きたい職業」、親の「就かせたい職業」でみると、男子児童は、スポーツ選手、警察官、運転士・運転手となっていますが、保護者は、公務員、医師、会社員となっています。女子児童は、ケーキ屋・パン屋、芸能人・歌手・モデル、看護師となっているが、保護者の希望は、看護師、公務員、薬剤師となっている。将来の夢が、児童の願いよりも、親の願いや思いの方が大きい場合がある。そして、将来の夢に、中学校の受験など影響を受ける可能性がある。

また「お父さん、お母さんに言われたから」「この夢は無理そうだな」と考えている児童もいる。

このことから、児童の将来の夢は、好きなことや親、身近な人の存在が最も影響を与えることが考えられるが、キャリア教育によって、「こんな職業もあるよ」と可能性を広げることが考えられる。

課題3である。ある児童の例を示す。

「大きくなったら、ぜったいしょうがっこうのせんせいになるの。」「職業調べも先生を調べよう! 職業体験も、先生に関係する保育園に行こうかな。」「やったー! 先生になったぞ。これから約40年間子どもたちのために頑張るぞ!」という将来がある。

しかしながら、「大きくなったら、ぜったいしょうがっこうのせんせいになる。」と考えていたが、キャリア教育によって、職業調べは「今、私があま



濱田 直樹院生

り知らない仕事を調べよう！」、職業体験は、「学校で指定されたパン屋へ見学に行くよ。」と視野が広がった。そのことで、パン屋さんはもちろん、歯科医やアナウンサー等、当初とは異なる職業に就く可能性が広がる。

学級活動の内容の取扱いでは、小学校から中学校、高等学校へと系統的なキャリア教育を進め、ポートフォリオ的な教材等を活用して、発達の段階に応じた系統的なキャリア教育を充実させることになると考えられている。

そこで、キャリア・カレンダー（仮）の作成を試みてはどうだろうか。小学校では、世の中には様々な仕事があることに気付く。中学校では、身近な仕事を体験する。高等学校では、自分に合う、合わない仕事を考えるなど、段階を具体的に設定し、系統的に指導していく。

キャリア教育で学年間・学校間で重なりや無駄がないように、キャリア教育の計画をカリキュラム・マネジメントしてはどうだろうか。

キャリア教育カレンダーを作成し、小中一貫教育の日などを活用して、カリキュラムの共通理解を図ることも考えられる。

平成23年の「キャリア教育の手引き」の4領域8能力は整理され、基礎的・汎用的能力をして、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、問題対応能力、キャリアプランニング能力に設定された。

まとめとして、以下のような提案をしたい。

① めあてカードは、小中連携を見据え、項目を厳

選する。

- ② 子どもの意思を聞きつつ、可能性を広げていくキャリア（職業）教育が必要である。
- ③ 系統的に、発達の段階に応じた指導を行う必要がある。

2 子どもたちに社会や職業との関連を意識した実践（教育と医療の視点を加味した提案）

教職実践専攻スクール・リーダーコース

國武 淳之介

キャリア教育、キャリア・パスポートにも大きく関わるキャリア・カウンセリングについての事例を述べる。

事例は、特別支援学校知的障害教育部門就業技術科の生徒である。将来の職業的自立に向けた専門的な教育を行っている。就業技術科の対象は、知的障害の軽い生徒たちで、具体的には、愛の手帳4度程度の生徒たちが多く在校している。入学者選考に合格した者が入学し、卒業後は企業就労を目指している。そのために、職業に関する教科という就労への実践的な教育を行っている。また、インターンシップなど、学校外での活動も多くあるのが特徴の一つである。

※実践事例(1)「キャリア・カウンセリングの実施」

声優を就労希望していた高等部1年生の事例は省略

実践事例(2)「医療と連携したキャリア・カウンセリングの実施」

高等部2年生のBの就労希望は、体を動かしている仕事であり、清掃業務や倉庫の軽作業などであった。2年生で、希望の職種へ初めて1週間を通しての実習を行った。そこで、足が痛いとの訴えがあった。今まで痛みを訴えたことはなく、また、1週間立ち仕事をするのは初めての経験であった。

学校で行われている整形外科検診があるため、保護者にも了解をとり、まずはそこで診てもらうことにした。担任は、その場に帯同し、これまでの本人の様子、実習の業務内容、本人の就労希望などを医師に伝えた。

その後、外板扁平足であり、足底板（インソール）

を使用すること、リハビリもした方がよいとのことであった。医師からは、足底板（インソール）を使用しても長時間の立ち仕事は難しい可能性という示唆があった。また、医師からもBにその旨を、本人の進路希望に寄り添いながら伝えてくれることを共有した。

担任は、本人の様子を、リハビリ時などに医師と端的に報告し合うことを確認した。また、学校内での本人の精神面のフォロー体制構築と、医師の助言や本人の様子から実習計画変更もあり得るため、それに進路担当と備えた。

その後、Bには、希望ではない就労先になるかもしれないという不安や迷いが出てきたが、担任を中心に、自身の思いを受け止める環境を設定する必要性ができた。医師からも本人の進路希望を配慮した対応をしていただいたり、担任は本人の思いを吐き出す時間を設けたり、保護者には、言いにくいことは学校側から伝えるので家ではフォローに徹してほしいことなどを依頼した。そのような関わりの中で、Bは自身の体について理解ができるようになった。様々な職種の実習を体験する中で、今までは合わないと思っていた職種がそうではないということなど自己理解ができてきている様子であった。その中で、これまで以上に将来と生活について考えるようになり、実習先でも自分のできることや必要な支援を伝えられるようになった。

そして、自分自身で、デスクワークもあり、軽作業もあるハイブリットな就労先がよいとの決断になり、今は医療関係の企業に勤めている。

この事例で大切なことは、本人を中心とした医療とのつながりをもてたことだと思われる。教師、医師の互いの分野で、本人に関わり合った。その結果キャリア・カウンセリングを分担しながら行なった形になった。また、教師は、医師にBの就労希望と足の状況に絞って見解を依頼することで医師も答えやすい状況になったものと思われる。そのときにキャリア・パスポートがあれば、それを活用して、医師保護者ともに共有できてさらによかっただろうと思う。医療との連携をイメージすると、教師と医師が密接であることが大切だと思われる。しかし、

ともすると、教師は医師に対して教師の困っていることを相談していることもあるような気がする。生徒が困っていることを中心にすることが必要であり、生徒に対する思いを教師がはっきりとしたビジョンをもって伝えることが必要ではないだろうか。

実践事例(2)をまとめる。

本人を中心に据えた連携。困っているのは、教師ではなく生徒である。この認識が大切である。ともすると、教師の困り感の相談にすり替わってしまう。

簡潔な情報共有。多くの時間は取れない。的を絞った、明確な情報交換を行うことが必要である。教師の専門性、医師の専門性を生かした対話の役割分担が効果的であると思われる。



国武 淳之介先生

この事例を振り返ると、キャリア・パスポートで関係者が全体共有ができると、さらに意思の統一がしやすいだろうと思われる。幅広いカウンセリングにも、キャリア・パスポートの活用は効果的である。

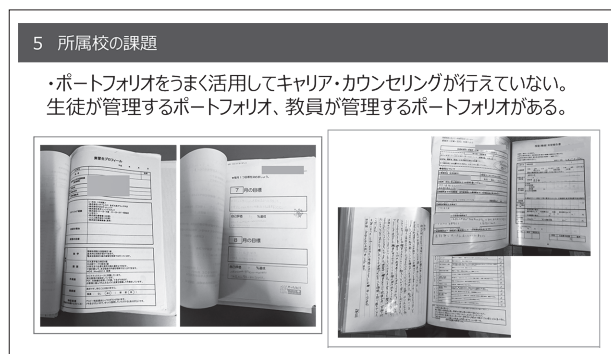
事例校でのキャリア・パスポートについての課題について述べる。

キャリア・パスポートの有効活用をするためには、キャリア・カウンセリングが一つのポイントであるとして、そのキャリア・カウンセリングの事例を述べた。また、実は事例校ではまだキャリア・パスポートと名付けては行っていない。すでに、ポートフォリオを生徒たちが作っているからである。そのような事例校の課題としては、ポートフォリオに記述する際には、生徒は気付きや変容を見失うことが多いということである。

そこで、メモ帳のように気軽に記録できるものが

あるとよいのではないかと考えた。後で見返してキャリア・パスポートにまとめることでより精選されたものが自分自身で確認できるのではないかとと思われる。メモを取ることを学校で推進しており、授業や実習でのメモの活用を生徒たちが行っているが、キャリア教育の視点に立った活用、自身の感じたことや気づきをメモすることも可能ではないかと考える。

続いての課題として、ポートフォリオをうまく活用してキャリア・カウンセリングが行えていないことである。生徒と教員が管理するポートフォリオがある。下の写真の向かって左側が生徒が管理しているポートフォリオ、右側が教員が管理するポートフォリオである。



生徒と教師のポートフォリオ

実習先への礼状などもその当時自身がどのように感じていたのかが分かる重要な資料であるが、職員室の鍵の掛かる棚に保管されている状況で、生徒が気軽に見返すことはできていない。内容を精選し、二つあるものを一つに統合することがよいと考える。それに目を通すだけでも、自己評価につながるようになるのではないだろうか。また、すぐに手に取れるもの、電子データなどが理想と考えている。

Ⅳ シンポジウム；シンポジストのコメント（当日の要項より）

1 「キャリア・パスポートの有効活用における教師の役割」

東京都練馬区立北町小学校校長
田村 亜紀子

平成29年に告示された学習指導要領において、改めてキャリア教育の意義と役割が示された。同時に「キャリア・パスポート」なるものが示されたが、具体的な姿が見えず、多くの教師の頭の中に「？」が浮かんできた。実際、小学校では、「入学したての文字も書けない1年生が、『なりたい自分』をイメージできるのだろうか」「職業体験は中学校だから、小学校ではキャリア教育はやっていないのに、何をどうするのか」等、不安の声も聞かれたのは事実である。



シンポジウム風景1

一方で、これまで、子供たちが学級や学校生活において、役割をもちその責務を果たすことで、「役に立つ自分」や「社会の中の自己」を見つめることは、特別活動を中心とした様々な学習活動において、繰り返し行なわれてきている。さらに、学期・学年の節目や学校行事等を振り返ることにより、子供にとっての「社会」である学級や学校と自分との関係を見つめ直し、「希望や目標をもって生活する」「よりよく生きる」ための思考を深めることも行ってきたのである。そして、こうした活動では、ほとんどの場合が、何らかのワークシートに記録し、その成長を教師自らが認めるコメントをつけ、子供自身の成長の記録としてきたのである。そのワークシートは、担任教師の思いや力量などにより差が見られ、それらを学校全体で作成するまでには至らなかった学校も少なくはない。

このように考えれば、「キャリア・パスポート」は、これまで行ってきた子供自身のキャリア形成の過程

を、学校全体が組織的に作成することに他ならない。すなわち、「この学年のキャリア・パスポートとして、何をどのように残しておくか」を教員間で協議することにより、一定の基準以上で残すことができるのである。また、そのための授業展開や指導方法についても検討することで、教員間差を少なくすることにもなり、どの子供にも、一定のキャリア教育を行うこととなるのである。

さらに、キャリア・パスポートを蓄積していくことは、子供たち自身が、それぞれの発達の段階における自分の成長を振り返り、見つめ直し、修正をしながら次のステップを考えることにつながっていく。小1の記録には6歳なりの、小6の記録では12歳としての自分が残されている。それらを見つめる15歳の自分を、当時は想像もしていないだろう。しかし、実際に中学校卒業時には、それらを振り返り、その当時の自分と対話をしながら、自分自身の成長へと目を向けていくことになるのである。その成長の過程を、学校が責任をもって、どの子供にも残しておくキャリア・パスポートは、「未来の自分が、小さい頃の自分を見つめ、抱きしめてあげるような宝物」となるのである。

教育の目的は人格の完成である。子供たち一人一人が、自分の人格の形成過程を知る上でも、キャリア・パスポートは大きな意義をもっている。だからこそ、教師はその意義と効果を理解し、どの子供にも、希望あふれるパスポートを持たせることが不可欠である。

2 「キャリア・パスポートでつながる学びとその可能性」

神奈川県教育委員会教育局支援部
子ども教育支援課 指導主事
宮坂 英行

キャリア・パスポートは、児童・生徒が、キャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのこと、

とされている。

小・中学校では、これまでも年度初めや学期・学年の終わりなどの区切りの時期に、学習面や生活面について児童・生徒自身が振り返り、次の学期や学年に向けた目標を所定の様式に記入する取組が行われてきた。私自身の実践を思い返しても、通知表とは別に、生徒が学期の取組を自己評価する取組（『自分で通信簿』と名付けていた）を続けてきた。

これらの取組をキャリア・パスポートとして新たに機能させるために、工夫が求められている。具体的には、次の2点である。

- ① キャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力の視点で自己評価する。
- ② 小学校入学から高等学校段階まで引き継いで活用する。

まず、①については、学習指導要領で強調されているカリキュラム・マネジメントと関連がある。学校は、あらゆる教育活動について、そのねらいや指導計画等を見直し、改善を図るが、それは、児童・生徒が「今・ここ」の学びと将来との関わりを意識したり、共通した視点で見通しや振り返りを行ったりすることにつながる。そのため、各学校では、キャリア教育の視点を踏まえた、育成したい力やめざす児童・生徒像を具体的に示し、児童・生徒、保護者と共有することが不可欠になる。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の関連の中で教育活動を行い、児童・生徒自身が成長や変容を記述していく。さらに、教師や保護者といった大人が対話的に関わりながら、意味づけていくツールとなるのである。

また、義務教育段階から高等学校へ、キャリア教育の視点が、校種を越えた教師間で共有されることによって②が実現される。これまでの実践では、その年度で完結し、次年度に引き継いで活用されることすら少なかったはずである。私自身の経験でも、目の前の生徒が小学校で記入したであろう様式を、知る由もなかった。また、私の学級で記入した『自分で通信簿』を、次の学年に持ち上がり活用したこともない。

キャリア・パスポートに添える教師のコメントは、



シンポジウム風景2

「今・ここ」にいる児童・生徒だけではなく、未来のその児童・生徒や担当する教師も読み手になる。今後は、学級・学年・校種といった意識の壁をなくし、一人の児童・生徒が社会的・職業的自立に向けてバランスのよい成長を遂げるための、連続した学びの一時期を担当しているという自覚や、他学年や他校種の実践に対する敬意と相互理解のための努力が、これまで以上に教師に求められる。

V まとめ

今年度は、コロナ禍の中で、これまでのように参会者を招いての実施にはならなかったが、院生諸君の準備、進行、報告、シンポジウムへの参加、記録などの参画により、子どもたちの将来を見据えたキャリア・パスポートの活用に向けた教師の役割についての学びを深めることができた。

学習指導要領の改訂に際しては、新たに位置付けられたことは何か、これまでと何がどのように変わったのかといった形式的な部分に関心が寄せられる。変更点、改善点の理解は重要であることは言うまでもないが、その背景を周到に把握しなければ、実のある指導はできない。

今次の改訂では、学校教育における喫緊の課題であるキャリア教育の充実が求められ、その要が特別活動とされた。今回のフォーラムにおいては、文部科学省の特別活動担当の教科調査官である安部恭子先生の基調講演を拝聴し、「生徒指導・特別活動の

理論と事例研究」の授業における学びを生かした院生の事例報告を基にしながら、シンポジウムでは練馬区立北町小学校の田村校長先生、神奈川県教育委員会の宮坂先生からの貴重な情報と助言をいただいた。

今後、教員として教壇に立つストレートマスター、そしてミドルリーダーとしての現職教員、いずれの院生諸君もそれぞれの立場でこのフォーラムでの学びを生かして、子ども自らが豊かな将来を構築しようとする意欲を高め、将来に向けた学びをサポートしてくれることを期待したいところである。

(赤堀 博行)